
『ホラーホラー・フェスティバル～数珠繋ぎの作者たち～』第5話

天海 沙月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『ホラーホラー・フェスティバル』数珠繋ぎの作者たち』 第5話

【Nコード】

N0927B

【作者名】

天海 沙月

【あらすじ】

「真夏のホラーフェア」で自分が書いた小説と同じように、自分が殺される……。リレー小説、第五話です。

（前書き）

これは、リレー小説の第五話です。

今までの順番は、

ひとやすみ先生↓和佐先生↓アオキチヒロ先生↓霜月沙羅先生↓天
海沙月

となっております。

りん。

鈴の音が鳴る。

一度聞いたなら、忘れないような、他の鈴とは違う、特徴的な音。初めて、『死』という事が現実的なものに感じられた。

私は、死ぬのだろう。

それは、予感ではなく、確信。

*

「ただいまー」

鍵を開けて玄関に入ると、私は常のように郵便受けから夕刊を引き出す。と、封筒が一緒に落ちた。どさり、という妙に重い音。

友達からかな。私は、わくわくしながら差出人の欄を見る。

……。無い。

確かに私の名前と住所が書いてあるにも関わらず、差出人の情報はまったく書かれていなかった。

大体、封筒がちよっと地味だ。その上、厚さが異常だった。

ビデオテープぐらいはあるんじゃないか。

とりあえず、家の中に入って、居間のテーブルに新聞を放り、鞆を下ろそうと、自分の部屋へ向かう。

母は出張で出かけているから、今、家の中には誰もいない。

階段を上がって、低めの本棚の上から携帯を取ると、ネットに繋ぐ。

そして、椅子の上にリュックを下ろし、お気に入りから『小説家になろう』秘密基地』を呼び出した。

私は大抵、秘密基地で掲示板をチェックしてから、『小説家にな

ろっ」へアクセスする。

画面を下へスクロールさせ、〈仲間募集〉をクリックすると、『真夏のホラーフェア』のスレッドが上がっていた。

夏休み頃に私が参加した企画のスレッドだ。何故今頃上がっているのだろう？ とりあえず、クリックしてみる。

『霜月 沙羅

ホラーフェアに参加した方々に伝えたいことがあります。突然ですが、最近のニュースは見ましたか？ 交通事故のニュースや、キエロの文字、赤子の手……そしてそれらが出て来る小説を読んだ覚えはありませんか？ ……私達は死ぬのだと思います。詳しく話すと、『

「？」

何だこれ。

内容もよくわからないし、長い文章でもないのに、途中で終わっている。

霜月沙羅という名前が入っていなければ、荒らしだと思っただろう。荒らしが霜月先生の名を借りたということも考えられるけど。

ピッ、と短く携帯電話が鳴り、「充電が必要です」のメッセージが表示される。

私は非常に携帯の使い方が荒い。おかげで、まだ一年半ほどしか使っていないというのに、後ろのフタは無いし、しょっちゅうネットを使うせいで、ボタンも下だけ剥けている。

何より、電池パックに少量しか電気が貯められなくなった。

最近では、ネットに繋いでも30秒がいいところだ。

とりあえず、一端電源を切り、携帯を充電器に繋いだ。

けれど、あの文章が頭から離れない。

交通事故のニュース、キエロの文字、赤子の手。

最近のニュースで見えていたが、どこか既視感を覚えた。それも其

の筈だ。実際に其れと同じ出来事が出てくる小説を読んだのだから。
「ん？」

自分の考えながら、さらりと流してしまつところだった。
現実で起きた事件と同じ出来事が小説の中で起こっていた。
裏を返せば、読んだ小説と同じ出来事が、現実で起こっているということ？

まさか。

小説の読みすぎだろう。

私は、机の上からはさみを取った。さっきの封筒を開けてみよう
と思ったのだ。

「!？」

赤。

赤、赤、赤、赤赤赤赤赤。

ビデオテープを連想させる厚みのある封筒から出てきたのは、夥
しい量の赤いクレヨン。

封筒をひっくり返す。しかし、赤いクレヨン以外に、一枚の紙片
も入ってはいなかった。

差出人不明。中身は赤いクレヨンだけで、便箋は無い。送り主の
情報は何も、無い。

……気持ち悪い。

途端、怖ろしい考えが頭をよぎった。

うちの郵便受けは、小さく、間にブラシのようなものが挟まって
いて、チラシや新聞のような紙しか入らない。

こんな、ビデオテープ程も厚みのあるものは郵便受けを通らない
のだ。

でも、確かにこの封筒は新聞を取ったときに一緒に落ちた。

つまり、既に郵便受けの中に、家の中に入っていたということだ。

——どうやって？

お母さんは出張。お父さんも仕事に出かけているから、日中、家
には誰もいなかった筈なのに。郵便物を受け取れる人物など、いな

かったのに。

りん。

不意に背後で、鈴が鳴った。

驚いて振り向くが、ぴたりと閉じた押入れがあるだけ。

赤いクレヨン。鈴の音。

私は、知っている。

この出来事を知っている。

他でもない、私がホラーフェアで書いた小説——『猫伽草子』と同じなのだから。

*

翌日。私は何事も無かったかのように学校にいた。

けれど、授業などまったく聞いておらず、意識は昨日の赤いクレヨンと、掲示板の書き込みに向けられている。

——猫伽草子は確か、主人公の元に大量の赤いクレヨンが送られてきて、それは昔イジメで死なせてしまった女の子の飼い猫からの復讐。

そして、その飼い猫は猫又となつて、主人公の親友に化けている——とても省略して言えば、そんな感じだったと思う。

しかし、肝心の親友と猫又の名前がどうしても思い出せなかった。

「次移動だよ。早くー」

「あつ、待ってヨモギ」

呼ばれて、筆箱を持ち、私は親友の蓬よもぎの方へ向かった。いつの間にか授業は終わっていたらしい。

「なんか眠そう」

「んー、昨日遅くて」

あれから、掲示板の不可解な書き込みが気になって、良く眠れな

かったのだ。

内容が途中で終わっているから、近いうちに霜月先生が続きを書き込むだろうと思って、何度も確認したのだが、あれから新しい書き込みは一件も無かった。

どうしてあの書き込みは途中で終わっていたんだろう？

「死んじゃったから」

「！」

今、言ったのは誰？

「どうかした？」

どうやら、蓬には聞こえなかったようだ。

「……なんでもない……」

空耳だよ。私は少し早足に、教室を出た。

りん。

鈴の音。

違う。さっきのは空耳なんかじゃない。

と、筆箱が少し重くなっていることに気づいた。

ずしりと、嫌な重み。

少し前に、中身を減らした筈なのだが、ぱんぱんになっている。

筆箱を、開ける。

何しろぱんぱんなもので、開けにくい。

少し開いたところで、指に何かが当たった。

指に付いたのは、赤色。

「うわっ！」

筆箱から大量の赤いクレヨンが溢れ出した。ばらばらと、緋色が床に散らばる。

間違いない。これは猫伽草子だ。

『……私達は死ぬのだと思います』

霜月先生の書き込みが頭をよぎる。

やっぱり霜月先生は、もう。

他の人たちは？ 他の、ホラーフェアの参加者はどうなんだ？

交通事故のニュース、キエロの文字、赤子の手。

「……！」

三人、霜月先生を入れて四人。

私も近いうちに、死ぬのだろうか？

猫伽草子と同じく、親友に裏切られ、トラックに轢かれて。

＊

帰るなり、私は携帯を手に取り、秘密基地の掲示板を開いた。電源が切れないように、充電器に繋がたままだ。

ホラーフェアのスレッドをクリックする。

やはり、新しい書き込みは無いけれど、今度は「返信」という場所を押す。

知らせなきや。

私は、文章を打ち込んだ。

『皆さん、突然ですが』

りん。

鈴の音が鳴る。

いや、音だけじゃない。

にゃあ、と不気味な泣き声。

其れは、特有のしなやかな動きで、近づいてくる。猫だ。

大きな、三毛猫――。

「っ！」

私は咄嗟に充電器から携帯を外すと、一気に階段を駆け下りた。玄関でスニーカーに足を入れると、ちゃんと履くのもどかしく踵を潰して、体当たりするようにドアを開けて玄関から出る。

どうすれば、この惨劇を止められる？

私は走りながら考える。

怪談話などをすると、霊が寄って来るといのはよく聞く。ホラ

ー小説も同じく。

そうだ。

小説を削除すれば。

猫伽草子はもう『外に出てしまっている』が、他の作品ならまだ間に合う。

私は携帯を開いた。秘密基地の掲示板に繋がったままだ。

急いで続きを打ち込む。

『ホラーフェアの小説を削除して下さい』

まずい。電池の表示が二本になっている。そしてそれは、すぐに一本になった。

電池が切れてしまう。

急いで次の文章を打つ。

猫は？ 猫からはまだ逃げられているだろうか。

息を切らせて、ひたすらに走り続けると、四辻の灯りの下に、誰かがいるのが見えた。

蓬だ。

「ヨモギ……」

「近寄らないでよ」

どん、と私は蓬に突き飛ばされた。

「あ……」

そうだった。猫伽草子に出てくる、猫と親友の名前は、
『ヨモギ』

じゃあ、蓬は、猫伽草子の一部だったんだ。
親友だと、思ってたのに。

「……っ」

死にたくない。

私は、咄嗟に突き飛ばされた方向へ跳んだ。

「！」

蓬の予定より遠く、誰かの家の前に、私は倒れる。

小説では、たまたま通りかかったトラックの前に、突き飛ばされて飛び出してしまった、ということだったが、さすがのトラックも、家に突っ込んで来まい。

私は、フタがない所為でむき出しになっている、電池パックをこすった。

暖めると、少し電池が長持ちするのだ。

お願い。まだ切れないで。

私は、「送信」をクリックする。

途端。前方から、ぱあっ、とライトが顔にかかった。

「え？」

それは、トラックのライト。

私は息を呑んだ。

運転手が、乗ってない――。

*

つつ、と道路に、紅い筋が付く。

筋の根源たる場所には、大破した誰かの家の玄関と、そこに突っ込んだトラック。

そして、手足が異様な方向へ曲がり、只、血を流すだけの袋と成り果てた、ぐちゃぐちゃになった私の死体。

もうちょっと、ましな死に方をしたかった。

尾の先が二股に分かれた猫が、私の死体へ近寄る。

握り締めた携帯の画面には、秘密基地のスレッド一覧が出ていて、ホラーフェアのスレッドが一番上に上がっており、書き込みが成功した事を示していた。

猫又は、腹立たしげに、猫には持ち得ない力をもって、携帯を踏み砕く。

『天海沙月

皆さん、突然ですがホラーフェアの小説を削除してください
はやくしないとみんなしぬ』

これだけしか、文章を残せなかった。

時間が無くて、最後の方はひらがなだ。

でも、小説を削除しても遅いかもしれない。

だって、小説を削除するよりも先に、私達の方が削除されている
かもしれないのだから。

（後書き）

第五話でした。

やはり、自分の死体を書くのは抵抗がありますね（汗）

もっとグロくなる筈だったんですが。

それでは、次の方、よろしく願いします（ここから繋がられるかな……）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0927b/>

『ホラーホラー・フェスティバル～数珠繋ぎの作者たち～』第5話

2010年10月8日15時42分発行